

岡田研吉, 牧角和宏, 小高修司著 『宋以前傷寒論考』

かつて日本の東洋医学の世界では、後世派のアンチテーゼとして江戸期に発生した古方派が勃興し、さらなるアンチテーゼとして折衷派・考証学派が現れた。歴史は繰り返すというが、同じ様に明治以降の古方派・後世派のアンチテーゼとして平成の考証学派が現れたといえよう。この平成の考証学派は、江戸期の考証学派と異なり、文献の解析能力のみならず卓抜する臨床能力をもっていることが、2007年広島で開かれた東洋医学会総会でのシンポジウムでも知られるようになった。その代表といえるのが『宋以前傷寒論考』の著者である岡田研吉, 牧角和宏, 小高修司氏らである。

彼らの『宋以前傷寒論考』の中では、現在日本の東洋医学の主流を占める派に対して、いくつかの方針転換をしなければならないような学問的指摘を行っている。ひとつは、『康平本』『康治本』が成無己の『注解傷寒論』から派生した本であること。二つ目は、三陰三陽篇の六経伝経について、「太陽・陽明・少陽」が『素問』以来の流れであって、それを変える古典は存在しないこと。三つ目に、「合病」と「併病」の間に古典的には違いが無いこと、等である。この書によって指摘された事実を、臨床的にどのように解釈していくかにつ

いては、各流派達が、今後それぞれ解答を見つけて行く必要があるだろう。

医史的にも、この書により北宋校正医書局の孫奇や林億ら宋臣が行った宋改といわれる作業が、単なる文字の入れ替えだけでなく、大幅に内容までも変更を伴ったものであることが解き明かされた。現存の『傷寒論』は、宋以前には傷寒の概念として一般的であった狭義の傷寒を扱うのではなく、広義の傷寒を扱う書として宋改で発展を遂げたといえる。さらに、本書は『傷寒論』の三陰三陽の世界が宋臣たちによって作られた世界であることを示した。そして、これらの改変の理由として、宋代の気候が寒冷期から温暖期へと変化したことによって、疾病構造も変化したためという日本医史学雑誌でも掲載された小高修司氏の論文を紹介している。

本書は今後の『傷寒論』研究には必読の書となるであろうし、東洋医学・医史学を扱っているものにとっても極めて有益な書と言えよう。

(松岡 尚則)

〔東洋学術出版社, 〒272-0822 千葉県市川市
宮久保3-1-5, 2007年6月, A5判, 総602頁,
8,000円+税, TEL. 047(371)8337〕

川越修・友部謙一編著 『生命というリスク』

本書は、同志社大学と慶應義塾大学を会場に開催された〈生命の比較史研究会〉における報告と討議をもとにまとめられた論文集である。7名の執筆者の研究領域は、日本やドイツの近現代における、社会、経済、社会福祉、家族、ジェンダーと幅広い。

序章「生命リスクと20世紀社会」で、編者の

川越修は、現代日本における少子化・高齢化問題を「生命リスク」(人びとのライフコースにおいて、新生児・乳幼児期、妊娠・出産、病気、加齢などを契機に顕在化する、生活・生存を不安定化させる身体をめぐる問題群とそれに対する社会の対応策を捉えるための仮説的概念)の回避を目指した20世紀社会の戦略の行き詰まりを示す問題